アメリカの新島襄

講演	伊藤 彌彦〔いとう・やひこ〕
講師紹介	同志社大学法学部教授

新島襄との出会い

私は日本思想史を勉強してきました。出身大学は国際基督教大学（ICU）でしたが、新島のことについては、随分昔に『新島襄　わが人生』（鑓田研一編）という本が家にあり、読んだことがありましたが、「敵（かな）わない人だな」というのがそのときの第一印象でした。その本は新島の一生を時系列に、新島の言葉の断片を散りばめた語録で構成されているのですが、極めて精神主義的でして、立派といえば立派ですが、「これは僕の肌に合わないな」という印象でした。しかし、そのなかで、一つだけ肌に合うものがありました。それはフィリップス・アカデミーに在学していたときの作文です。春夏秋冬を「春君、夏君、秋君、冬君」と紳士になぞらえて、「春君、穏やかな貴君は…、峻厳なる冬君・・・」という調子で、会話を交わす設定なのですが、ユーモアがあり想像力豊かで、これは面白いなと感じて読んだ記憶があります。

その後、たまたま就職先が同志社になり、ほどなく創立100周年記念事業の『新島襄全集』出版が始まりました。全集の記念配付を受けたので、何気なくそれを読み始めたわけであります。そのなかに日記や紀行文、新島が自分で略伝のような形で書いたものがありますが、これが極めて瑞々しくて面白いのです。「これは学内で流通しているイメージと違うんじゃないか」と感じ、等身大の新島、普段着の新島に興味をもつようになりました。

同志社に来たのは1974年ですが、そのころのキャンパスには第二次大戦中に徳富蘇峰が語った新島イメージが強く残っており、憂国者・新島、ナショナリスト・新島という印象の強いものでしたが、新島全集を読んでみますと、平民主義者、民主主義者ではないかと、どうもそんな気がしまして・・・、それで勉強を始めました。

そのことをチャペル・アワーで何度かお話ししました。というのは、私はクリスチャンではないのですが、法学部の宗教主任の役がよく当たったからです。この礼拝の時間は閑散としており、学生数名と職員の方相手に、荒野に向かってしゃべるというのはこういうことか、と思いながらお話した記憶があります。ただ有難かったのは、必ず話したことが『月刊チャペル・アワー』に載ったことです。そのお陰で一冊にまとめることができました（『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』伊藤彌彦著　晃洋書房　1999年）。私は人間新島襄、等身大の瑞々しい新島を紹介しよう、と心がけました。幸いそのような新島論を学内で受け入れてくれましたので、それ以来少しずつ新島研究を続けてきたのであります。

幕末の不本意人生

彼は1843年（天保14年）、神田に生まれた江戸っ子です。1864年（元治元年）函館に行き、その年の6月14日（旧暦）アメリカへ密出国し、帰ってくるのが1874年11月26日です。アメリカへ出発するときが満21歳、ということは、大学4年生くらいの歳にアメリカに行ったという人なのです。

なぜアメリカに行こうとしたのか、というよりむしろ、なぜ日本を脱出したかったのか。身の回りの世界にどんなイメージをもつ青年だったのか、を考えてみました。密出国までの新島に関しては、ほとんど資料がありません。ともすればその少ない資料と、後日自身で書いた半生記でもって、新島の人生全部を語る傾向がありますが、そういう資料は、ある限定的なものとみて、拡大解釈をしない注意が必要だと思っております。

まず取り上げたいのは、新島が書いた作文「脱国の理由」、そして、明治17年に自分の人生を振り返ってまとめた自叙伝「My younger days」です。彼自身が書いた自分の話なのですが、この二つには多くの微妙なチグハグがあります。資料的に客観性が高いのは後者の方です。「脱国の理由」を書いたのにはそれなりの理由がありました。両者に共通してみえるのは、幕末の江戸社会＝伝統社会のなかで抑圧された青年の不本意な人生です。彼は勉強好きでありましたが、その勉強の時間を奪われ、嫌な、嫌な玄関番の仕事をしていたわけです。退屈で時間を持て余す仕事なので職務中に本を読もうとして仕事仲間から浮いてしまいます。武士はもともとガードマンみたいな仕事から生まれたのですから、元服して最初に就いた玄関番はそう悪いポストではありません。「文」の仕事より「武」の仕事に就いた方が出世コースであったと思われます。しかし新島にはそれが不本意で、本を読んでいたりするので、仲間からも疎まれる、それでくさって・・・という、幕末は不満の多い人生を送っていた。これが一つ、自伝から分かってくることです。

航海で知った自由

しかし、そんな新島を明るくした次のような船旅の話があります。彼はかつて藩主から特別に蘭学修業生に選ばれたこともあり、幕府の軍艦操練所に通い、オランダ語の航海術の本も勉強していました。ある日、安中藩の本家筋にあたる備中松山藩板倉侯の購入した洋式帆船「快風丸」が、江戸と岡山の玉島間を往復する航海の際に、乗船するチャンスが訪れたのです（「玉島紀行」という紀行文が新島全集にあります）。このときの2カ月の船旅で、江戸屋敷を離れて、初めて自由な空気を吸ったのです。大阪では安治川を遡り、御堂筋も歩いています。

このときの自由の味が忘れられなかった。それまでの自分の暮らしてきた人生は、4000坪の藩邸がすべてで、「そこでは空も四角く区切られていた」と象徴的な言い方をしています。そこから自由を得るという体験をした。それで味を占めまして、やがて快風丸が函館に行く情報を聞いたときには、必死で乗船工作を行い合法的に函館に行きます（脱藩ではありません）。さらに密出国しました。そのときのメモ帳「函館紀行」（『新島襄全集5』）を見ると、明らかに旅に目覚め、外界に好奇心をもっている人間だということがわかります。幕末の青年たちをみますと、ある者は不満を尊皇攘夷運動に、政治変革に向かいましたが、新島は、むしろ旅の方に熱をあげた青年でした。

二段ロケット方式の脱出

新島のアメリカ行きは、いわば二段ロケット方式で成功しました。まずは、江戸藩邸から函館への脱出です。数日後に快風丸が函館に行く話を聞いて、夜も寝ずに慌てて乗船工作をしましたが、その乗船工作は極めて周到なものでした。父親が反対するのはよく知っていますから、父親にはいわず、まず上司にもちかけ、上司から父親に話がいくようにもっていきました。そしてとうとう７日目で許可を得ることに成功したわけであります。

この函館に行くことができたことが、新島の人生の分岐点といえるほど大きかったと思われます。私は、新島の渡米は二段ロケット方式をとったと言いましたが、一段目が函館行きで、二段目がアメリカ行きという意味です。しかしこの二つの旅は、客観条件が全く違っているのです。一段目の函館行きは合法的です。藩に対して航海術等々の勉強をしたいという名目で、15両という奨学金をもらっての合法的留学です。後に「同志社大学設立の旨意」（入学式で読まれる、あの「旨意」です）に、「脱藩して」と書いていますが、脱藩ではありません。精神的には脱藩でしょうが、奨学金までもらって函館に行っているのです。それに親からも大金をもらって（全部で、２年以上は暮らせるくらいの金額だったろうと思いますが）行ったということです。

二段目のロケット、函館からアメリカ行きは、密出国＝非合法です。見つかったら殺されるかもしれない。金もなかった。わずか４両しか持っていない。密出国の直前に、自分の持ち物すべてを金に換えても4両しかなかったのです。数カ月のうちに大金が目減りしています。金華山沖の怪物に取られたと「函館紀行」の中に書かれております。どうやらその怪物は女性だったようです。海千山千の女性に初（うぶ）な青年が引っ掛けられたようですが、そのあたりのことが書かれた「函館紀行」の頁が３分の１ほど、鋭い剃刀で切り取られているので真相はわかりません。資料に接近できる立場の人で、新島を聖人君子に見立てたい人が切り取ったのでしょう。新島襄の奥さんが切り取ったとしたら、八重さんは著作権継承者ですからその権利はあるのですが、そこまでしていないでしょう。新島自身が切り取った可能性もないと思っています。このように日本からの密出国は金もなく非合法的な脱出劇でした。

密出国

密航を計画した新島襄には、彼を取り巻く三つの不安がありました。第一にうまく出国できるかという不安。大きな問題です。そして第二に航海中の不安。お金がない航海であること。金を持たないで船に乗っているわけです、ボートピープルを見てください、金を持たないで乗ると、船長の意のままに奴隷のように使われるケースがあるわけです。第三の不安は、果たして首尾よくアメリカに上陸できるのかという問題。これら三つの不安がありました。

密出国に関して（ここが新島の不思議なところですが）、「これは」と思う人物4名に打ち明けております。内3名は日本人です。皆、新島の意気に感じて一肌脱いでくれた人物です。福士卯之吉という人は、手船まで出して密航船へ運んでくれたのです。新島には、危険を冒しても彼のために協力してくれる人が現れる、という不思議な魅力があったということがわかります。さらにセイボリーというアメリカ人の船長も、そんな青年なら乗せてやろうと、自分の船ベルリン号に乗せてくれた。恩人です。セイボリーは後に、それが露見しまして、船長を解任されてしまいます。しかし後日、ボストンで新島を訪ねてきてくれて感動的な再会をしております。

航海中の心境

出国は、割とうまくいきました。では密航中の船では、どうだったでしょうか。ベルリン号ではなかなか苦労の多い状態でありました。それを示すのが次の有名な新島の漢詩です。

函楯を辞してより
空しく洋人に役せらる
憂国また憂国
憤然として身を思わず

私が1974年に赴任したころの同志社では、「憂国の人・新島襄」というイメージがキャンパスに強く残っていました。「憂国の志もだしがたく」日本を脱出したのであり、この漢詩はそれを詠っているとされていました。

しかし、この詩がどういう状況でできたかを推測してみると、ベルリン号に乗って8日目のことで、どうもそのとき殴られたか、何か事件があったらしいのです。思わず自分も刀を抜いて仕返しをしようと思ったが、しかし自分は志がある身なのだ、大きな志で渡米するのだから、こんなことで刃傷沙汰を起こしてはいけないと思い直した。そこで「慨然たるに堪えず偶然一詩を得たり（不堪慨然偶然得一詩）」と題するこの漢詩が生まれた。それが実際のようです。私に言わせれば、この詩は憂国の詩ではありません。アメリカ船中で、異文化接触で不適応を起こし、カルチャーショックで、陰々滅々となったときに書いた詩なのです。函館を離れてから空しく西洋人に使われる。しかし、「自分には使命があるのだ」、「憂国、憂国」、「細かいことは気にせず頑張ろう」とそう思い直し、なんとか人格破綻を免れた時の詩です。

このベルリン号での28日間は、特に大変な期間だったようです。誇り高く、肉体労働を蔑視していた武家の青年が、「お前、働け」、「肉体労働をしろ」と言われるわけです。それだけでも屈辱なのに、さらに、英語を習おうとしてもなかなか教えてくれない。何回も発音ができなくて、とうとう顎を押さえられ、「言え」と命令された、と書いています。当時の武家の青年にとって、肌に触られることは、屈辱です。また、その人のことを「ケチな野郎だ」と言っております。多分、授業料でも出せと言われたのではないでしょうか。金銭を云々することは武士世界のタブーでした。

そのような状況ではありますが、船の中で成長もしていきます。それがわかるのが、次の詩です。これは上海で乗り換えたワイルド・ローバー号でつくった詩です。

何百の白駒去って怱々
往時けむりの如く全てこれ空し
かち得たり我が身筋骨硬なるを
一年強半船中に在ればなり

何百もの馬で駆けていた江戸社会の光景は、遠い昔の煙のように消え去った。1年半くらい船に乗っているから、筋骨がモリモリとしてきた我が身がある、と詠っているわけです。この詩からも分かるように、新島は船上生活にも慣れてきて、のびやかさが出てきました。明らかに人間的な成長がみられるということであります。

もう一つ船中のエピソードは、「新島襄の洗濯」（『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』所収）のことです。新島は「航海日記」のなかに三度洗濯したことを記録しています。最初は、1864年7月24日（元治元年6月21日）、船に乗って７日目の記述です。

今は襦袢（じゅばん）三枚を洗ふ。我家に在し時白衣を洗らわす、・・・・・父母をして此辛苦を知らしめば必らず四行の涙潸々ならん

学問をしようとしているこの私が、洗濯しているのだよ。お父さん、お母さんが2行ずつ涙を流して同情してくれるだろう、「まあ、かわいそうに、武士の子どもともあろうものが、自分の襦袢を洗濯している」と、こういってくれるだろう、と書いています。

それから半年ばかり経って、旧暦の元日にあたる1865年1月28日（新島は「元治二年正月元日」と書いています。年号が文久になったのを知らないからです）。

元日に衣そそくは如何（いか）なるぞ　去年（こぞ）の旧（ふる）あか洗抜とて

1週間に1度、洗濯日があったようですが、この週は元日が洗濯日だったのです。それで今自分は元日に洗濯している。旧世界の古垢を洗い抜くように。こう和歌を詠っている。洗濯している自分を笑ってみせるユーモアが生まれています。それだけ、ゆとりが出てきているのです。

3番目の記述が、それから4カ月後。1865年5月17日にこんなことを書いています。

雨水を取り我衣を洗へり、且船主の下衣、褌、枕覆等を洗へり

雨水をためて洗濯しています。それも自分の物だけではないのです。上海で乗り換えた船、ワイルド・ローバー号のテイラー船長の下着・パンツ・枕カバーまで洗ったことが分かります。こんなことまで平気でできるようになったのです。後日、ある説教で、自分が船長のパンツまで洗った話を語ったとき、聞いていた人が皆シーンとなって話を聞いた、と回想しています。それから教え子の蔵原（くわはら）惟郭（これひろ）がアメリカで苦学生として苦労しているとき、「俺は船長のパンツまで洗ったことがあるんだ、労働は人間を強くするんだ、頑張りなさい」ということも書いているのです。

誰かが洗濯しないと汚れた物はきれいにならない。自分の物は自分で洗うのは当たり前だという基本的な人間の原則にやっと気がついたのです。武士の意識から次第に自立した個人に目覚めていったわけであります。また肉体労働に対する偏見から解放されていったのです。こうしてアメリカに着いて、ヒドゥン家にホームステイしますが、世話になって、繕いものをしてもらったり、洗濯してもらったりすると、率直にお礼を言っているのです。皆さんのように十何時間一飛びでアメリカに行ける現代は、日本の文化をそのまま持ち込みますけれど、1年数カ月の船中で成長し、アメリカのカルチャーを身に着けた、ということが言えるのではないかと思います。苦労はしましたが、新島は船中生活で成長したのです。

アメリカ上陸のとき

ボストンに着いたのが、1865年7月20日です。ここでワイルド・ローバー号は錨を下ろしたのですが、しかし本格的に入国できたのは10月13日で、3カ月も船の上で暮らしています。当時、旅券制度などあまり厳格ではない。アメリカは移民が来る国ではありますけれども、なかなか上陸はできない、不安な時期だったと思います。「航海日記」を分析して、そのころの経過を『明治思想史の一断面　―新島襄・徳富蘆花そして蘇峰』（伊藤彌彦著　晃洋書房　2010年）に、新説として出しておきました。かい摘んで申しあげますと、まず船の持ち主ハーディーと、いつどのように会ったかが問題です。この人はアメリカで新島を保護し学費を出してくれた親同様の人物です。

「ハーディ氏ノ生涯ト人物」（『新島襄全集2』417頁）にこうあります。

此の船が港に着せし数日の後君は一寸船迄見へました、又数週を経し後其の船長の骨折により予はハーデー君に面接するを得、又君の助けによってアンドウの学校に送られ学に就くの幸を得ました

と。船主ハーディーは入港時と出航直前の2回、ワイルド・ローバー号に来ています。2回目のときは、テイラー船長の助けで、船主のハーディーに会うことができた、というわけです。もし新島が上陸できなかったならば、その船と共に、また出港しなければならない状況でもあったわけです。しかしテイラー船長も、上海でベルリン号のセイボリー船長からアメリカ密航を志す新島を引き受けた以上責任を感じていたはずです。新島はテイラー船長に「アメリカで勉強したい」と伝えています。また、新島は船長室の世話係をしていましたから「面白い青年だ」と評価されていたようです。

あの新島の書いた「脱国の理由」は、テイラー船長との共同作戦で作られたとするのが私の新説です。これまでの説では、ハーディー氏の三男によって書かれた評伝「Life and Letters of Joseph Hardy Neesima」（Hardy, A. S. p.98）の記述に「十月十三日に船を降りて、船員宿で三日がかりで、英文を書きました」とあり、それを船主のハーディーに見せたところ、感心して身許を引き受けてくれた、という話になっています。しかし、私はそうではないと思っております。「航海日記」の記述からみると、10月13日は船上でハーディーに会っている日です。そのときには作文「脱国の理由」ができあがっており、それをハーディーが読んだと考える方が矛盾が消え、合理的に解釈できます。

新島の立場を想像すると必死でアメリカ上陸を嘆願したはずです。もし上陸できないと命に関わるからです。その際、新島が頼る先はテイラー船長しかない。実際にそれを頼んだときの英語のたどたどしいメモがテイラー家に残っており、それが書かれてから17年後に、評伝を書く時、ハーディー家に渡されました。メモの内容が、洗練された英文となって「脱国の理由」のなかに使われています。そのことが、この作文が間違いなくテイラー船長と新島の合作として作られた証拠といえます。テイラー船長は、船主ハーディーは熱心なキリスト教信者だということを知っていましたから、ハーディー氏の胸に響くように、新島はキリスト教を求めてアメリカに来たのだ、とかなり強調して作文しています。これは事実ではないのですが、江戸から函館へキリスト教を学ぶために来たが、函館にキリスト教を教える人がいなかったからアメリカに来たのだ、と書いているのです。それはハーディーがキリスト教に熱心な人であるから、彼の胸を打つ作文にするにはどうすればよいか、ということを考え、事情をよく知っているテイラー船長に相談した結果だと考えられます。彼のコーチを受けて書いたのだと思えます。

すでに「なるほど新島襄（77）」（拙書『なるほど新島襄』154頁）に書いておきましたが、昨年、小クラスで新島の話をした時にレポート課題として、〈『脱国の理由』と『My younger days』との間にある相違点をどう解釈するか〉というテーマを出しました。すると非常に面白い答案が出てきました。政治学科の和田剛君の解釈で、「『脱国の理由』を書いたときの心境は、現代のエントリーシート的要素を持ち合わせているのではないか。就職活動でエントリーシートを書くときは、必ず相手の企業を褒める。まして新島襄の場合は、ハーディー夫妻という内定先がなければ命の危険すらあったのだから、必死さは『脱国の理由』におけるアメリカ賛美に滲み出ているといえるだろう。新島襄はあくまでアメリカに魅せられた青年になる必要があった。それに比べると、『My younger days』の方はアメリカ賛美が少ない」という比較を書いています。これは当たっているのではないかと思いました。さすが3回生から就職活動を始めているだけあります。「私は御社に興味をもっています」と、その会社に魅せられているということを一生懸命書くのと同じように、新島も「アメリカに魅せられています」と書いた可能性は十分あると思います。この「脱国の理由」に心を打たれ、船主ハーディーは新島を引き取ってくれることとなり、上陸が可能となりました。これで、三つ目の不安も解消されたのです。

A・ハーディーの夢と新島襄

このアルフュース・ハーディーという人物と新島襄との関係について、礒英夫さんからいただいた面白い資料があります。礒英夫さんは紀伊国屋書店発売のビデオ『新島襄』の制作者ですが、英語に秀でており、ハーディー家の多くの子孫と現在も交流を続け、非常にたくさんのことをご存知の方です。Wisconsin Evangelという1893年に発行された新聞記事にハーディー氏が自身の人生選択について吐露しているのです。この記事に、

I want to go to a college and become a minister

とあります。若いとき、自分は大学へ行って牧師になろうと思っていた。それでフィリップス・アカデミーに行った。ところが健康を害して同校を中退し、牧師の夢が叶わなかった。しかし、ビジネスで神に仕えるという新しい希望が生まれた。神のために事業をすることは神聖なことだ、と考えたわけです。クリスチャン・マーチャント、マックス・ウェーバーが言ったようなプロテスタント商人として神の栄光のために金儲けをする、まさにその典型的なピューリタン実業家だったのです。

しかし牧師になれなかったという挫折感ももっていたのです。そこに、アジアの片隅から見知らぬ青年がやって来て、キリスト教を求め、日本に広めたいと語っている、これは放っておくわけにはいきません。自分が、果たそうとして果たせなかった夢を、この日本からきた青年に託すかのように、一肌脱ぐ。両者の思惑が一致したのではないでしょうか。両人ともそれを、神のプロビデンスだと言っているのです。プロビデンスは、「摂理」というと難しい漢字になっていますが、皆さんはパソコンを使うとき、プロバイダーを通じて情報を得ていますね。語源からいうと神様はプロバイダーの最大手なのです。神はすべての用意をしていて、そして与えてくれる。ハーディーにも新島にも、出会いをプロバイドしてくれたという解釈なのであります。

高等教育を受けさせた意図

こういう経緯で新島はアメリカに上陸しました。しかしアメリカ滞在という問題では、このハーディーと新島の間に微妙なズレがあったということを今日は申しあげたいのです。一つは、新島のアメリカ滞在が「脱国の理由」の作文に縛られることになったということです。キリスト教求道者であるということが強調されて、アメリカ滞在が意味づけられた、と言えます。ハーディーは、そのとき、新島を宣教師に仕立てようと考えていたようです。ここに、1870年4月5日付けハーディー夫人宛の新島襄の書簡があります。

> あなたのお手紙はこの九月から二年間神学を学ぶために私をアンドーヴァーに行かせることを伝えています。私がアンドーヴァー（フィリップス・アカデミー）を去るときには、私はアマースト（大学）で二年間、アンドーヴァー（アンドーヴァー神学校）で一年間学ぶようにとのお話でした。（「新島襄全集6」72頁。同じく“Hardy, A. S., Life and Letters of Joseph Hardy Neesima,” p.98）

つまり最初のハーディーの予定では、フィリップス・アカデミーの後で新島をアマースト・カレッジに２年間、アンドーヴァー神学校に１年間行かせる計画だったのが、今度アンドーヴァー神学校に２年間行かせてもらえるようになった、と書いています。

> しかし決められた期間よりも一年長く私はアマースト大学におりました。悲しいことに病気のために今年の半分ほど無駄にしたのでしたが。

最初の予定に対して、新島は病気のせいで大学に1年長くおり、しかも3年目の後半は殆ど授業を取っていないということです。アマースト・カレッジは4年制です。そこに2年通わせる。ハーディーは促成栽培で新島牧師、新島伝道者をつくろうと考えたように思います。

「W. S. TYLER、HISTORY OF AMHERST COLLEGE、」の統計表で1867年のアマーストの学生数を見てください。Sr.（4回生）が49人、修了生が48人で一人だけ卒業できなかった。Jr.が44名、So.（2回生）が人、62Fr.70人（1回生）が在籍して、その隣に編入学の2回生6名、3回生8名、4回生0名。2年で卒業することを予定したなら、新島は3回生編入生の一人だったのではないでしょうか。しかし3年かかって卒業し学士を得ています。

どうして中途編入できたのでしょうか。実は、新島は数学が抜群にできる青年なのです。江戸時代にサイン・コーサイン・三角法を習得している。ワイルド・ローバーの船上では球面幾何学を用いて、船の位置を計算して船長と競争して遊んでいるくらいです。ですから、数学力で編入できたのかもしれません。そして3年で卒業ができた。ハーディーがアマースト大学の理事をしていることも影響しているはずです。大学の理事の大事な仕事の一つは寄付集めですが、ハーディーは実業家として、フィリップス・アカデミーにもアマースト・カレッジにもたくさんの寄付をしている、そのような人物でもあったのです。新島にとっては幸運でした。

両者の微妙なズレ

しかし、そうしたなかでも、両者の思惑に微妙なズレはあったと思います。そこで、ここに面白い資料を紹介します。これは新島が使っていた数学教科書のなかの日本語の書き込みです。1870年前後のものだろうと思いますが、フィリップス・アカデミーでも使い、アマースト・カレッジでも使っていた教科書です。この書き込みを発見したのは島尾永康先生です。もう退職された工学部所属の科学史の教授で、この件を論文のなかで分析しておられます。

今回、文学部の露口卓也先生に手伝っていただいてこの史料を精査しました。資料をご覧ください。薄い鉛筆書きを濃い斜線を引いて消しているところです。この文章が意味深長なのです。直筆の資料の面白さは、心理状態が読み取れることです。人間は微妙なこと、弱気な疑問は細い字で書くものです。単なる情報だけではなく、書いたときの心持ちもわかる。その箇所に何を書いていたのでしょうか。筆圧の微妙な揺れが教えるのは、「あたかも言ってはならないこと、考えてはならないことを考え」ていたことです。メモし、そして抹消している。薄く書いて、強く消している文章だということです（拙著『なるほど新島襄』146頁参照）。内容はこう書いています。

> 貴殿のかくいはるゝは金の為（ためか）哉　若し金の為ならばワしに金を借（貸）し下され　ブラウンの為ならハ小子少し論あり

「貴殿」という人物から何か言われている。その中身は他の箇所の書き込みから分かるのですが、横浜にいる宣教師ブラウンからの頼みを伝達して「早く日本に帰って仕事をしたらどうか」という話を持ち掛けられているのです。それに対して新島は疑問を感じ、「自分に金を出すのが嫌だから帰らせようと思っているのだろうか。それならば金を貸しておいてほしい。後日、日本で働いて返すから。それとも、もしブラウンのために日本に帰れというのであれば、自分の考えは違う。帰りたくない」と書いているのです。これを見ますと、ハーディーの方は早く伝道者に仕立てて日本で仕事をさせたい。しかし、新島はもっとアメリカで勉強したい、という思惑のズレがあったことが、よくわかります。

日本で、どういう仕事をするかについてもズレがあったようです。帰国直前に、宣教師として日本に派遣されるにあたり、ラットランドのグレイス教会で行った演説（同志社では有名ですが、現地では地方新聞一紙だけが報道した演説）で、「日本で大学をつくりたい」と爆弾発言をしてしまうのです。ハーディーから宣教師として仕事をしてほしいと思われているときに、新島は学校をつくりたい、といいます。日本人を説得するには教会よりもまず学校教育なのだということをよく知っていたからです。ここも、宣教師として仕事をしてほしいというハーディーの意見とは微妙に食い違っているところだと思います。

帰国直前に養子になる

ところで、新島はハーディーの養子だといわれています。Joseph Hardy Neesimaとなっていて、Hardyというミドルネームをもらっています。しかし、そのミドルネームをもらったのは帰国直前でした。いよいよ宣教活動に出発するというときに養子となったので、最初から養子扱いではなかったのです。礒英夫さんから「本当に養子だろうか。ハーディーの他の3人の子どもは皆、財産をもらった。奥さんも100万ドルをもらったのに、新島が遺産相続をしていないのは養子ではないからではないか」とメールをもらいました。その面からいうと、確かに養子ではないのですね。ただ新島は、学資の援助のほか、同志社のために多額の寄付をハーディー氏から受けています。そう考えると、生前贈与を受けたと捉えることもできるかもしれません。

日本に帰る直前に、もう一つハーディー氏から勧められたのは、アメリカ国籍に変えて帰ったらどうかという提案でした。国籍がアメリカなら、キリスト教を宣教していて迫害された時、アメリカ大統領による保護が得られるから、という理由です。しかし新島は、自分がアメリカ人として説教をしたなら、日本人はついて来なくなるからと断りました。もし断っていなかったならば、養子となり遺産相続も受けていたかもしれませんね。そういった微妙なことが資料を読んでいると解ってきました。

神権政治のマサチューセッツ植民地

次に、新島が暮らしていたころのアメリカをイメージするために、当時の一般的なキリスト教事情を紹介します。新教・プロテスタントの国アメリカは、すさまじい「神権国家」として始まりました。特にマサチューセッツ州は、アメリカ諸州のなかで政教分離がいちばん遅い州でありまして、神権政府がすべてを仕切る州、牧師と政治家がほとんど一体となっていた州でした。同じ新教のなかのクェーカー教徒の女性がボストンで火あぶりにされたこともありました。また、姦通した女性には胸に「A」と緋色で刺しゅうした服を着せる習慣をホーソンの小説が伝えていますが、その舞台になったのがマサチューセッツの口うるさいピューリタン社会です。

マサチューセッツ州を制した教派はコングリゲーショナル＝組合派（会衆派）です。この会派は、イギリスで迫害されてオランダに逃げ、それからアメリカに渡りました。自分たちは迫害されて、海を渡って信仰の自由を求めたのですが、アメリカに来ましたら、今度は自分たちの宗教を第一とする不寛容な態度をとりました。つまり、他の教派を受け入れようとはしなかったのです。初期アメリカでは州ごとに宗教政策のタイプが違いました。ペンシルベニア州のように寛容なところもありましたが、その方が例外的であります。

マサチューセッツ州で、ものごとの意思決定はどうやって決めるか。ジェネラル・コート（通常、総会と訳しています）という機関が、司法・行政・立法のすべての権限をもっていまして、そこで決定していました。総会においては必ず組合派牧師が主要ポストを占めておりました。ですから、組合派の教会員でなければ損をする州です。新しい土地を広げて、そこに拠点を築いていくにしても、教会員でなければ土地を分配してもらえない。組合派の教会員であることは特権階級である、そういった社会が続いていた州なのです。

神話化されたプリマス植民地―メイフラワー契約の実態

マサチューセッツ州の隣の植民地は少し違っていました。プリマス植民地です。プリマスはメイフラワー号が到着したところですが、最初は、マサチューセッツ州とプリマスは別の組織だったのです。メイフラワー号に乗船していたうちの半数くらいがクリスチャンで、後の半数は俗人（新教と関係のない人たち）でした。そのキリスト教と無関係の人とクリスチャンが共同で暮らさなければならない、ということで暮らし方の工夫をしました。

102名のうち半数は分離派信徒（新教）で、その他は労働力として投資企業の募集に集まったよそ者（strangers）といわれていますが、その多くは英国教会の信徒であり、そういう人が混在して生き延びないといけない、そこで結ばれたのがメイフラワー契約です。これは、宗教は違うが一緒にやろうという形をとった共同体で、アメリカの政治形態の原型とされています。プリマスでは宗教と政治は分離されました。しかしまだ「信教の自由」という原理は存在していません。同質と異質の多面的な多文化的な共同体の形ができたといわれています（斉藤眞論文『歴史のなかの政教分離』所収　161頁）。

イギリス社会に似たマサチューセッツ植民地

他方、マサチューセッツ植民地はそうではなく、コングリゲーショナルが支配していたわけです。政教一致、ジェネラル・コートによって政治と宗教が一体化していたわけで、この州は異分子排除の同質的・閉鎖的共同体であったというわけであります。

また初期アメリカは、ある意味でイギリスです。まだイギリス植民地でしたから当然でもありますが、イギリスの階級社会に似ていたのです。小檜山ルイさんが書いているものに、

「一八世紀のアメリカ植民地は、私たちが今思い描く以上に、階級制度と権威主義が幅を利かし、また、聖と俗の境界線が曖昧な前近代的な社会であった。階級と権威は結びついており、それは、聖なる世界との関連において理解された。教会の一員であること、その中で良い家族席を確保することの意味は、そこから出てくる」（小檜山ルイ論文『歴史のなかの政教分離』所収　216頁）とあります。たとえば、教会の座席が決まっていて、有力な人はここに座るとか、座席表に名前が書いてあるというのが、そのころのマサチューセッツ州の様子です。

リバイバル―キリスト教のアメリカ化

これを突き崩す動きが出てきた。1720年、30年のころから起こるリバイバル（大覚醒運動）といわれるものです。そのころの牧師は強大な権限をもち特権階級だったわけですが、それを批判する動きが、教会のなかで一般会衆の間から出てきました。どういうことかといいますと、そのころ牧師になれる者は、エール大学かハーバード大学の出身者に限られていた。それに対する批判です。「キリストの時代、パウロは漁師でした。エール大学を卒業したとお思いか」と、痛烈な言葉を投げかけます。

それから牧師の質が問われる。「彼の説教はつまらない」、「あの牧師は本当に信仰に目覚めた人なのか」、「回心体験はないのではないか」と、教会に集う信徒から不満や批判が起こりました。また平信徒のなかにも人生経験が深く、牧師以上に魅力的な話ができる人たちもいます。あるいは自分は神の啓示を受けた、と「目覚め」を体験した人が説教を始める（彼らをプリーチャーといいます）。そうすると、そちらの説教の方が面白く、迫力があることもあるわけです。それで、教会が混乱をきたしたのです。既成教会を批判する方は、「ここの牧師は俗物だ。回心体験のない牧師は危険だ」と言い始める。

それに対して牧師たちも反撃し、新参の説教者を批判します。「彼らは牧師の資格をもっていない」、「按手礼を受けていないのに説教をしている」「資格のないものは危険だ」と批判するのです。こういったことが、波のように新しい国を覆っていき、その動きのなかで、ややイギリス風だったアメリカの新教がアメリカ化していきます。多様な宗教が、そこで競争するように力をもって人びとを捉えていくことになるのです。

そのような情勢のなかで、Gilbert Tennent『回心体験をもたない牧師は危険』（1740年）が出版されます。それに対する反論、John Hancock『資格のない説教師は危険』（1743年）も書かれる。こんな現象が現れてきます。

ジョナサン・エドワーズ

もう一つ、宗教の内面的深化も進みました。信徒の心を圧倒する牧師が出てきたのです。ノースハンプトンという場所の教会に、ジョナサン・エドワーズという人が牧師に就任します（1727年）。彼は、新教のなかでも特にカルヴィンに忠実で、二重予定説の教理を語り、「怒りの神」の説教をしたのです。人間というのは堕落している、神の国を求めないといけない。神は君たちを地獄に落とすかどうかはすでに決まっている、というような説教をして、これが非常に力をもっていく時期がありました。

ところが困ったことが起こってくる。ボストンでビジネスに成功していたエドワーズの叔父が、エドワーズの説教を聴いているうちに、「自分は天国に行けるはずがない。地獄に落ちるしかない」と人生を悲観して自殺してしまったのです。ほかにも自殺者がでます。あまりにも恐怖心を煽られるので人びとがエドワーズの説教についていけなくなりました。とうとう1750年、エドワーズはノースハンプトン教会を追われます。組合派の教会らしく、信徒が皆で投票して決めましたが、230対30票の大差で追放されてしまいました。

そして、エドワーズはインディアンに宣教すると言って種痘をして準備していましたが、新しくできたプリンストン大学の学長に推されます。ただ種痘の後遺症で高熱を発して亡くなったので、プリンストン大学長は名前だけで終わります。しかしここで、新しい説教の場をインディアンに、西部に求めた、ということは注目すべき点ではないでしょうか。この流れがインド宣教、日本宣教へと海外に流れていったわけです。

政教分離の確立

アメリカの独立が1776年、合衆国憲法が1788年にできます。この憲法でも政教分離は規定されていなかったのですが、1791年の修正一条で規定されます。その修正で、連邦議会は宗教の「公定制」を認める法律を制定してはならないと定めました。公定宗教とは、政府がある特定の宗教を国教と認め、補助金を付ける制度です。この合衆国憲法修正一条でやっと政教分離が決まったのです。「政教分離」の重要な意味は、一般から集めた税金を特定の教会の補助金に使うことを禁止したことです。困ったのはマサチューセッツ州です。今まで組合派教会だけを優遇して税金を回していたからです。ですからマサチューセッツ州はなかなか連邦憲法を採用しなかった。アメリカ憲法の批准がいちばん遅れてしまったのです。1833年に連邦憲法を批准して、そこで政教分離を受け入れました。今日アメリカ東部というと、リベラルと思われていますが、過去の歴史は違っていました。

「怒りの神」から「愛の神」へ

ジョナサン・エドワーズを追放した後の18世紀後半からのアメリカのキリスト教は、説教の内容をだんだん「愛の神」へと変えていきましたし、人びともその方を受け入れました。19世紀アメリカのキリスト教は「愛の神」を説くようになります。さらに、自信を強めまして、この世の天国はアメリカに実現しているのだ、と言いはじめます。ジョナサン・エドワーズは、この世界をキリストのために奉仕させなければいけないと言ったのですが、今度は逆転しまして、キリストがアメリカという世界を創ってくれたのだ、この地上に天国ができたのだという見方が有力になります。やがて、「丘の上の町」（マタイによる福音書５章）とはボストンのことだ、現在のエルサレムはアメリカにある、という考え方に変化していきます。

変貌する19世紀

19世紀のアメリカは、社会もいろいろ変貌した時代です。30年代から70年代にかけて、アメリカは大いに変わっていったということであります。文末の参考文献に挙げておいたメイヤーは、「道徳哲学の教科書が書かれた1830年代と1870年代ではアメリカの思潮が大きく変化した。30年代は民衆的興奮、ポピュラーエキサイトメント、知的冒険心、福音主義の熱気があった。70年代は保守主義的、組織主義的、そして一段と強く現世的な思潮に変化した」（D. H. Meyer, p.136）といいます。こういう変化が起こっているのです。1865年、新島はまさに現世化が始まろうとしているアメリカに行ったということであります。

神学の衰頽と哲学の繁栄

そういうなかで、アメリカの大学教育も変わっていきます。それまで、アメリカの大学での学習方法は、ほとんどがレシテーション（暗誦）でありまして、平日大抵3科目、土曜日は2科目あって、覚えてきたことを暗誦するというような授業でした。レクチャーという新方式が始まってくるのが、このころです。神学の人気が落ちてきて、哲学が流行りだしたのも、このころです。神学はカレッジから追放されて神学校で教える科目になります。

他方、哲学が人気科目となり、自然哲学（ナチュラル・フィロソフィー）、知識哲学（メンタル・フィロソフィー）、道徳哲学（モラル・フィロソフィー）と3種類に分化していきました。そのころは、哲学を学んでいると就職にも有利だったようです。道徳哲学からは今の政治学や経済学が出てきます。知識哲学（メンタル・フィロソフィー）からは論理学、心理学が起こってきます。さらに自然哲学は自然科学に展開します。いろいろな実証諸科学が登場してきます。アメリカで博士号をとると、医学博士や神学博士以外、ほとんどが、哲学博士（Ph. D）と呼ばれるのはこの名残りです。

そのように学問分化が進んでいくなか、アマースト・カレッジは保守的な学校でしたが、時代の変化はゆっくりと現れます。神学を教えていたパーク牧師はフィリップス・アカデミーに追いやられたり、学長に自然哲学の教授スターンズが就任したりします。

アメリカの道徳教科書を研究したメイヤーがいうには、結局のところ、かつてアメリカ全体を包んでいた新教的な雰囲気は解体していった。それに代わるものとしては、道徳哲学、モラル・フィロソフィーで教えるのがいちばんいいということになった。それは形式としてはモラル・フィロソフィーであるが内容的にはプロテスタントの教えであって、それが19世紀のアメリカの社会道徳、国民性を形成していた、ということをいっています。

新しい人間解釈法

また道徳哲学が基軸にしたキーワードは、聖書ではなく、conscience＝良心という言葉であったとメイヤーは言っています。良心を教えることが、教育のなかで流行ってくるのです。メイヤーの著書のタイトル“The instructed conscience”『良心の教育』が象徴的です。つまり19世紀は道徳哲学、モラル・フィロソフィーの時代で、良心を教えていたわけです。具体的にはブラウン大学学長ウェイランド（F. Wayland）が書いている本が多く流通したので、メイヤーの研究も彼を中心に分析しています。

またウィリアムズ大学学長ホプキンス（M. Hopkins）も道徳哲学を教え、著書も有名です。新島も京都府から聖書の授業を禁止されたとき、その本を同志社の教科書にしました。ご存じのように同志社は、良心教育を掲げています。決してそれは偶然ではなく、19世紀後半のアメリカ精神界と対応しているのです。キリスト教に距離をおいていた徳富蘇峰も「良心」には理解を示し、キリスト教主義（「主義」の字を入れて幅を広げておいて）を「同志社大学設立の旨意」に盛り込んだということがいえるかと思います。

面白いのは、ウェイランドもホプキンスも医者だったことです。そのころ、進化論が出てきますから、バイブルに書いてあることが疑われている時代です。真理は「聖書」のなかにあるのか、それとも真理は「自然」のなかにあるのか、は当時の大問題でした。道徳哲学者らは、人間は神様から創られたものであるから、人間そのものを研究することが神の意図を知ることになる、と言いだします。「聖書」よりも、自然や人間自身のなかに真理を探す。人間自体を分析する学問になっていきます。ウェイランドは人間を構成する要素として、身体・智恵・情欲・良心・意思の５つを挙げています。人間理解が科学的、心理学的になっていきます。さきほどのメイヤーの著書のなかの引用として、ホール（G. Stanley Hall）というアメリカの教科書分析家は、この時代に「教会と聖書の権威に代わって個人の良心という権威が場所を占めた」と書いている。こんな時代に新島はアメリカ生活をしていました。もう一人道徳哲学者を挙げるとすれば、エール大学学長のノア・ポーターという人です。本人はキリスト教のつもりでしたが、彼は現在アメリカで、心理学の開祖といわれている人です。新島はポーターとは親しく、彼の家に泊まったという記録もあるようです。

当時の道徳教科書のなかで人間をどう見たかというと、人間は生まれながらにして道徳的な存在である、と見ています。もう一つは、人間は地球において、ある目的のために存在するものであると規定しています。人間には使命感があると強調する。これは同志社教育における新島襄の特徴です。人は生まれたときは、自分の意志で生まれたわけではない。気がついたら生まれている。人間がややこしいのは、自分は何のために生きているのか、理由を自分で見つけないと納得しない存在で、自分の存在理由を探すことです。そのときに新島が教

えたのは、人間はある目的のために生まれているのだということでした。まさにこのころのモラル・サイエンス、モラル・フィロソフィーの精神が、そのまま新島に受け継がれているといえると思います。

19世紀後半—哲学の後退と科学の時代へ

19世紀後半は、知識哲学・道徳哲学・自然哲学など「哲学の時代」のなかから「科学の時代」への萌芽が現れた時代です。ダーウィンの『種の起源』も出てきた時代です。最後に、面白いエピソードを紹介しますと、1858年、アンドーヴァー神学校創立50周年記念日に、ゲストスピーカーとして招かれたウェイランドが記念講演をしているところに、ニュースが飛び込んできました。それは「今、大西洋を横断してアメリカとヨーロッパをつなぐ海底ケーブルが完成した」という知らせでした。学生たちがワーッと沸き立ち、ウェイランドの演説はそっちのけで拍手喝采が起こったということです。

これを見ますと、神学校の学生も科学の進歩を受け入れているのが分かります。彼らは、「わがアメリカ人の信仰をヨーロッパに伝えることが簡単にできるようになった」、と喜んだというのですが、科学と宗教が協調できると考えていたようです。新島は、そのようなアメリカで暮らしたのです。そして19世紀後半のアメリカ社会の空気をいっぱい呼吸した新島襄はバチェラー・オブ・サイエンス＝理学士となって、日本に帰ってくるわけです。今日の話を詳しく知りたい方は、私の『明治思想史の一断面—新島襄・徳富蘆花そして蘇峰』をお読みくださると幸いです。

〔参考文献〕

伊藤彌彦『明治思想史の一断面—新島襄・徳富蘆花そして蘇峰』晃洋書房　2010年
伊藤彌彦『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』晃洋書房　1999年
伊藤彌彦『なるほど新島襄』萌書房　2012年
大西直樹・千葉眞編『歴史のなかの政教分離—英米におけるその起源と展開』彩流社　2006年
J・D・デイヴィス／北垣宗治訳『新島襄の生涯』小学館　1972年
『新島襄全集』2巻、6巻、10巻　同朋舎出版　1983年、1985年、1985年
D・H・Meyer The Instructed Conscience-The Shaping of the American National Ethic, University of Pennsylvania Press 1972
A・S・Hardy Life and Letters of Joseph Hardy Neesima (reprinted) Doshisha University Press 1980

2011年5月31日　同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地　「講演」記録

2013年3月補筆